

## 北村正司教授について

木曾栄作

あまりにも身近かな人について何かを書くように望まれると、どこからどう書き出したらよいかと迷うものらしい。北村教授と私との関係についてもこれは全面的に妥当するようである。

小樽商業学校（現在の小樽商業高等学校）と小樽高等商業学校（現在の小樽商科大学）をともに共通の母校とする北村教授と私との出会いは必ずしも偶然とは言えないであろう。北村教授は昭和6年3月小樽高等商業学校を卒業されたが、私は昭和2年3月の卒業であるから、同教授との出会いは小樽高商在学中のいつかであったろうか。

北村教授は小樽高商卒業後、直ちに小樽市立小樽高等実修商科学校教師として英語教員の第一歩を踏み出され、昭和12年3月には小樽市立商業学校教諭、翌年3月には北海道庁立小樽商業学校教諭に補せられ、校名改称により、北海道小樽商業高等学校、北海道小樽緑陵高等学校教諭として昭和30年3月までの実に24年の長きに亘り、本道の商業教育の中心として君臨していた小樽市においてその英語教育に専念されたのであった。

終戦後、アメリカの占領政策の一環としての日本の教育制度改革が行われることとなり、いわゆる6・3・3・4制度が導入され、これと平行して国立大学の再編成が断行され、小樽経済専門学校は専門学校から4年制大学として昭和24年5月31日に国内唯一の単科大学に昇格し、ここに小樽商科大学が誕生し、大野純一氏が初代学長に就任されたのである。他方、第2次世界大戦後、アメリカに生れた短期大学も日本へ導入され、特に私立短期大学は急激に数多設立せられ、これに応じて小樽市と北海道との協力により小樽商科大学に勤労青年のために3年制夜間の商学部としての短期大学が諸種の隘路を克服して付置されたのは昭和27年であった。あえて、この事実に言及

したのはこれが北村教授の英語学究として次の step に不可分の関係を持っているからである。私共、北村教授と親交を続けている者は同教授の高潔な人格とその卓越した見識と学才をいつの日か更に広く英語学界にその恩恵を浴せしめたいと念願していたのであるが、幸い小樽商科大学と同短期大学の誕生が同教授の人生行路の一転機のチャンスとなり、大野純一学長の深いご理解、苫米地英俊先生の強力なご推薦と私共英語科教官一同の心からの支持によって北村教授の小樽商科大学短期大学部講師への就任が実現したことは、緑丘学園にとって大きな喜びと収穫であったと信ずる。

早くも翌 31 年 9 月より 32 年 6 月までアジア財団およびフルブライト研究員として、アメリカ合衆国のミシガン大学（アン・アーバー市所在）英語研究所に留学を命ぜられ、英語教授法と言語学の研究を一段と深められたことは、同教授の多年蘊蓄された学殖が認められて海外研究員として派遣されたのである。帰朝後、昭和 34 年 3 月には助教授に昇任、更に昭和 38 年 8 月には教授に昇任されたのである。昭和 51 年 4 月 1 日に停年退職されるまで、全道くまなく中学校、高等学校において英語の実演授業を行われ、また同時に英語教育に関する講義、講演によって本道の英語教育の振興向上に尽された功績は実に多大なものがあったと言うべきでありましょう。北村教授が緑丘学園を去るに当って行われた「外国語の修業とその周辺」と題する最終講義が多大の感銘を出席の教官と学生に与えたのもまたむべなるかなと思わざるを得ません。

北村教授は学者、特に英語の学究として最も重要な資質である精緻な分析力と正鵠を得た判断力の持ち主であると畏敬の念を抱く一人であるが、理論面における強さと同時に実践面における強さをも兼ね備えている人である。英語教育の理論を大いに唱える人は多いが、英語教育の実践面においては全くなす所を知らない人が少くないのであるが、北村教授はこの点において得難い学究であり、また教授者でもあると言うべきでありましょう。

北村教授の学問的業績はその専門ともいうべき英語教育を中心とするものが最も多いのは当然というべきであろうが、それと同時に英作文および英会

( 20 )

話指導には卓越した才幹を備えておられることは周知の事実である。業績を研究論文のみに限定せず、もっとより広義にこれを解して現場における実演授業や英語教育者を対象とする講演や指導をも含むとすれば、同教授の業績の層の厚さは測り得ないものがあると信ずる。

筆を結ぶに当って、北村教授のご健勝と本道英語教育界への一層の貢献を切望してやみません。